

---

# W A R K S

小夜華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

WORKS

### 【NZコード】

N7646R

### 【作者名】

小夜華

### 【あらすじ】

「憎悪の事件」という感情移植が噂されてから3年。

ある国では、「歩き女」という最強の戦士が噂されていた。

目的はない。

ただ、歩くだけ・・・

1人歩き続ける彼女の後ろに、

振り返ると仲間はいた。

## 憎悪の事件

今から3年前の話だ。

第18人目国王、コラジア・ルラサンガラ・フレイシアの治めるフレイシア王国に、憎悪の反乱が起きた。  
かつてないほどの強い民の反乱に、歴史あるフレイシア城は焼き払われた。

国民たちの憎悪の先は国王、コラジア。

その反乱は、1人の兵士の、國中に張り巡らされた半紙にあった。

『家族、友人を探し求めている者たち、兵を挙げよ。

フレイシア城の地下でされている極秘実験とは、人体実験のことだつた。

我らの家族、友人を使って、人間の感情移植を進めている。  
こんなことが許されてはいけない。

現国王コラジアに民の怒りを!』

それが春の出来事だつたのなら、国民は半紙を書いた兵士を愚か者と笑つただろう。

しかし、実際に国民の中では、夏じろから行方不明者が続出していた。

加えて家族や友人がいないといつのに、眞面目に探しもしない国兵たちに怒りと不満を感じていた。

そしてその兵士の言つたことは、嘘ではなかつた。

コラジアは、城の学者と共に魔法を使った感情移植の実験を、国民を使って試していた・・・

その半紙は、国民の怒りを爆発させるきっかけとなつた。

## フレイシア城

「国王！西の門まで火が回っています…」  
「…・つ・つ・出口はないのか！」

国王コラジアは、自分を囲う炎と今の兵士の報告に恐怖を感じた。  
「国王！このままでは長年の実験が無駄に…！」  
弱弱しいその声は、城の学者代表、シマルからだつた。

老いた小さな体が震えている。

「くそつ今までの時間が…・・・！」

歯軋りをして呟いた国王は…・・・隣で震えるシマルを見て、  
焦りに汗がつたたその顔をにたりと歪ませた。

「なあシマル。」

「・・・はい？」

「お前は、肺の病気であったな。」

「・・・はい・・・炎の煙が・・・」

震えるシマルの声を聞きながら、国王はゆっくり腰の剣を抜いた。

「・・・」  
「国王！…！」

「シマル、お前はたいした部下があつた。そして氣の合ひ友だつた…

・・・」

「何をひ・・・…！」

後ずさるシマルを、コラジアはゆっくり追い詰める。

「お前は良い働きをした…・・・よって、ここで永遠の休息をとるよ  
う。」

剣が大きく振りかぶられる。

「ここで私を殺してなんの得が…」

「なに、死後の世界に少し罪を背負つていけばいいのだ。」

シマルが反論するより先に、振りかぶった剣は勢いよく振り下ろさ

れた。

「国王、報告がつ・・・！」

勢いよく扉を開けた兵士が見たのは・・・

剣を片手に、学者シマルを抱えた国王コラジアだつた。

「学者シマルをこの事件の発端者として罰した。兵を挙げ、全力で国民を広場に集めよ！」

「は、はいっ！！」

大声で叫びながら、兵士は出て行く。

「最後までいい働きをしてくれた・・・シマルよ。」

誰もいない炎が上がる部屋の中で、

誰よりも恐ろしい顔で・・・国王、コラジアは笑つた。

まだ怒りのくすぶる気持ちを抱えて、国民たちは国王最後の弁解を聞いてやううと広場に集つた。

そして大犯罪者、シマルを抱えた国王の話で静まつた。

人体実験をしたシマルの愚かさと自分の鈍さを語る国王。

誰も、国王が犯人をシマルに仕立て上げたことも知らず・・・

衝撃と無実の国王を襲つた罪悪感の中で、国民は国王の提案を呑んだ。

「シマルの罪を許すわけにはいかない。しかし・・・  
城一つ落としてしまつたこの国民の憎悪は計り知れない。  
どうだ、憎悪の感情だけ、移植してみようと思わないか・・・。」

## 憎悪の事件（後書き）

はい。初の投稿です。

つてかもーここまでだつたらわけわかんない話で終わるんだけど。

・・・ごめんね主人公！

次回には登場する・・・あ、ごめんしないかも。

ここまで駄文を読んでくれた皆様、有難うござります。

次話お楽しみに～～～

## 静かな酒場

フレイシア王国の外れ、リターナ町。自然豊かで人々まで穏やかなその町は、今ある噂でざわめいていた。

ある酒場。

「なあリサさん。これ、なんの騒ぎだよ。」

酒場に来るには少し早い、少年と呼べそうな男がカウンターに座っていた。

「それもわからないの？ほんと時代遅れねえ・・・。」

リサと呼ばれた若い店主は、呆れたように言った。

彼女も酒場の店主と呼ぶにはまだ若いようだが、客の扱いは心得ていた。

「いい加減町に下りてきなよ。あんな森に一人つて淋しくない？」

「全然、俺、多分一生あのまま。」

「淋しい男。」

リサはその変わり者から離れ、食器を片付けだした。

「いやいや待て！だからこれなんの騒ぎだよ？！」

男は、自分の後ろに広がる酒場の様子を指差した。

酒場はいつものようににぎやかだったが・・・今日はにじみやかの訳

が違う。

明るく騒がしく、酔っ払った男たちが踊りだす・・・いつもの風景と違つて、今日の酒場は皆で集まつて話し合ひをしていろみうだつた。

「この町で知らないつて、多分エザルだけよ。」

「だから、何を？」

エザルと呼ばれたその男は、もつて一度聞く。

「歩き女つて・・・知つてゐる？」

「歩き女・・・？」

エザルは、リサの言つた言葉を繰り返す。  
どこかで聞いた。確か・・・

「・・・ああ知つてる！あの旅してゐる女だな？」

「うん・・・まあそれぐらい知つてないとほんとの時代遅れだからね。」

山奥に住んでるエザルでも、歩き女の噂は聞いていた。  
けどその知識も多いわけでなく、その上噂なだけで・・・  
大剣を背負つた、恐ろしく強い女つてことしか知らなかつた。

「その女がね、今、ローザリナに居るらしいの。」

ローザリナはエザルの町、リターナ町の隣町で・・・

「はああああああああああつ？？！！」

エザルも、やつと状況を理解した。

「おい、つるせえぞ小僧！！」

後ろから、ある男が怒鳴った。

ガタイのいい男の怒鳴り声には威厳があり、恐怖を感じるものだつたが・・・

エザルも、負けじと言い返した。

「誰か教えてくれてもよかつただろ！俺だけか、無知は！」

「・・・お？なんだエザルか・・・。」

「おいおっちゃん！なんだ歩き女つてー！」

「あーアイツか・・・。」

大柄な男は、なぜか突然嬉しそうにニコニコと笑った。

「俺もよくしらん。けどな、俺は明日、ソイツを倒す！」

「はあ？」

周りの男たちが、拍手したり叫んだり離し立てた。  
が、エザルには訳がわからない。

「その女、明日来るのか？」

「噂ではね。」

リサが、そつけなく答えてくれた。

「なんで倒すんだよ？」

「まあコレ見る。」

今度はエザルの近くの男が、一枚の神をエザルに突きつけた。手配書のようだ。ゆつくり目を通した。

「…………おこおじさん。」

-  
h?  
L

「この三種類の田原にはあるそ

「戀愛の神話」

「それ、スジやねえよ馬鹿。」

「……………唔だらおおおおおおおお？！一億？！」

エザルの反応に、酒場の人達が笑う。  
しかし、エザルは笑い事ではないほどいの衝撃を受けていた。

「な?明らかにおかしいだろ?」

支那の歴史

「俺はそれを軍人共のミスだと思ってる！腕つ節なら俺もまけねえ

確かに、その男の体格から強そうることは見てとれる。

「じゃーよつはアレか？賞金稼ぎか？」

エザルの問いに、男は自信満々に答える。

そうエザルは思つたが口には出さず、

「まあ、頑張れよ。」

とだけ、言つておいた。

ふと酒場の外を見ると、夕日が傾いていた。  
早く帰らないと・・・帰り道が見えなくなる。

「リサさん、俺そろそろ帰るから。」

「はいはい。またね。」

重かつた空気が少し軽くなつた酒場から、エザルは出て行つた。

静かな酒場（後書き）

はい、男登場です。（誰だ）

ここので登場しましたよ・・・

主人公の噂がw

はい、次話お楽しみに〜〜

エザルの家・・・というか小屋は、エザルの父が作ったものだった。今はもういらない父だが・・・小屋は、どんな嵐にも耐えられる強度が自慢だった。

「ただいま。」

誰かが居るわけではない。

ただ、それがエザルの癖だつただけだ。

日が沈みだし、本の文字が読みづらくなつた頃・・・

小屋のドアを叩く、小さな音がした。

「いつものだ。」

そう思いながらエザルは本を閉じ、ドアを開ける。

思つた通り、そこには小さな女の子が居た。

白い肌と小さな体が、病弱な印象を与える女の子だ。

実際その通りだった。

「「んにちはー!」

元気なちょっとずれた挨拶に、エザルは苦笑いした。

「んー・・・今は「んばんはの時間かな。」

「あれ?ほんとだ。」

きょとんとした女の子の顔を見て、もつ一度エザルは微笑む。

そしてその女の子を小屋に入れた。

「今日の調子は？」

「鼻水はでないけど、咳は出る。」

「そうか・・・じゃあもう大丈夫かな。」

そう言いながら、エザルはレザーのポケットから小さな瓶を出した。

「ほら、コレを温かいお湯なんかで飲むんだぞ。咳が出なくなつたら、シナの病氣は治るから。」

「ほんと?」

嬉しそうな顔をしながらその女の子、シナは瓶に入った薬を受け取る。

「エザル先生、ありがとうございました!」

「おひ。」

小屋から出て行くシナを見送りながら、「走るなよ」と釘をさす。見えなくなるまで手を振る無邪氣な女の子を、エザルは笑顔で見つめていた。

ドアをしめて振り返ると、部屋の中はもう暗くなつていて、気付く。

森の中だけあって、日が沈むのは早いのだ。手探りでランプを付ける。

その途端、急に夜らしくなつた。

ああ、今日はなに食べよ・・・

ぽーっと、エザルは部屋で考える。

寝るままでこなすことなど、もうエザルには分かっていた。  
戸棚にある食べ物で簡単に夕食を食べて、また本を読み、着替えて  
寝る。

きっと明日の出来事も変わることはない。

しかしエザルは、この生活は決して嫌ではなかった。  
エザルが18という若さで一人で生活できるのは、彼に医術が備わ  
っているからだ。

その医学を勉強しながら、患者から少しづつ代金を払う。  
貰った代金で、細く長く食いつないでいく・・・  
エザルは今的生活から抜け出そうとも、今日の男のように賞金を稼  
ぐ気も、全くなかつたのだ。

口演（後書き）

ふうつーとつあえずは・・・みたいな感じです！

次話お楽しみに～～～

## 非日常

次の日。

空は、鈍く白い光を、雲の隙間から漏らしていた。

「朝からこじなんじや、今日は絶対雨降るぞ・・・。」

小ちく咳いて、エザルは窓から離れた。

頭の中で思い描いていた今日の予定を、全て帳消しにする。  
そして、今日一日小屋にいることに予定を立て直した。

エザルの予想通り、昼になると雨には雨が降り始めた。

「・・・せう言えば、今日は歩き女が来るんだっけ。」

昨日確かにリサは「明日くる」と言つていが・・・。  
この曲では、歩き女も動かないかもしれない。

雨脚はどんどん強くなつていぐ。

時折、雷鳴が聞こえるまでになつた。

さすがに森の中に一人で雷鳴の音を聞くのは、少し恐怖を覚えた。

しかし

その10秒後。

エザルは、1人じゃなくなつた。

「オニシ！…！」

「わあああああああつ？？…！」

突然の破壊音に、エザルはよく分からぬ声を出した。  
読んでいた本を閉じると同時に振り返ると・・・  
自分の小屋のドアが無残に落ち、雨が部屋の床を打つていた。

あー・・・取り付けつてめんどくさいのに・・・。

いや、そんなことよりも。

自分の小屋のドアを破壊した無礼な怪力は誰かと見つめた。  
そいつは・・・

「・・・は？」

苦しそうに息する女の肩は、あまりに華奢すぎた。

立ち込める木のせいで夜のよつと暗い中に、ギラリと大きな剣が光つた。

クリーム色、と呼べそうな髪は、濡れて雫が垂れている。

「いや待て待て待て……えつ？！」

なんで俺の小屋の前に、ずぶ濡れのいかにも怪しい美少女が？！

「…………あなたの家？」

弱弱しいその姿に反して、少女の声は力強かった。

「ああ・・・うん・・・そう・・・？」

自分の小屋なのに、パニックが重なつて疑問形になった。  
少女は冷静に外れたドアを片手で持ち上げ、壁に立てかけた。  
・・・あれ？ ドアってそんな軽いけ？

「悪い・・・蹴り壊した。」

「えつおまつ・・・蹴つた？！」

俺でもそれはできない気がするけど？！

「今急いでいて直せない・・・悪かった。」

そう言つて帰るひと後ろを向いたその少女の背こ・・・  
大剣と、血をエザルは見つけた。

「待つた。」

「・・・あ？」

傷を見た瞬間、エザルは反射的にその細い腕を握んでいた。

「あんた怪我してるだろ。それと・・・  
こんな山奥まで来て急いでるつて、誰かから逃げていなか?」

しばらく少女は口をつぐんだが・・・小さな声で、「正解だ」と言  
つた。

「俺、一応医者だから。ちょっと見せてみる。そんなんじや見過い  
せない。」

エザルの提案に、少女は話聞いてたか?ってほびの無表情で停止し  
て・・・  
また美しい無表情で、一度だけ頷いた。

傷をみれば直したくなる医者の本能のよつなものに従つて、エザル  
は何も考えずその少女を小屋に入れた。  
これが、エザルの非日常の始まりだった。

**非日常（後書き）**

なぞの少女祭場だよー！

次話お楽しみに～～～

## 傷だらけの

一通り、エザルは少女の傷を手当した。

「これ、短刀かなんかの傷だ・・・何された?」

エザルは少女の背中に問う。・・・しかし、少女は無言のままだった。

「なああんたも、俺からすりゃあ何にもしらない怪しい少女なんだよ。傷の理由くらこ教えてくれよ。」

「・・・・・」  
「・・・おこ。」

エザルはふーっと息を吐く。

「じじゃあこいつよつ。お前、一応俺の小屋のドア蹴り壊してるんだよ。

その代償として、傷の理由と名を名乗れ。」

エザルことでは、ドアが外れるくらくならなんとも思わないが・・・

「いつもしないと、何も話さない気がしたのだ。エザルの予想通り、やつと少女は口を開いた。

「・・・この町に入つたら男共に攻撃された。あたしの名前は、ジエライド・クロニウズだ。」「男共・・・?」

エザルの脳裏に、昨日の酒場の会話が浮かんだ。

そして、さつきまで少女が背負っていた大剣に目を向けた。

「・・・お前、もしかして歩き女か・・・？」

「・・・そう呼ぶヤツもいる。」

「・・・。」

呆気にとられたエザルは、少女をまじまじと観察してしまった。

「コイツが歩き女・・・？」

女つか、まだ全然少女じゃねえか。

こんな細い腕で、あんなでつかい剣を振り回すのか？

一瞬、軍人のミスという男の考えが頭をよぎったが・・・

いや、コイツ自分で名乗つたし。

それに、動きに無駄がない。戦い慣れてる証拠だ。

それでも噂と目の前の本人とのギャップに驚きつつ、エザルは口を開いた。

「歩き女なら、短刀くらい避けられるんじゃねえか？」

「・・・。」

少女はまた黙つた。

仕方なくエザルがもう一度条件をつけようとした時。

「・・・人は傷つけたくない。」

そう、少女は小さく呟いたのだった。

願つてもいない歩き女の登場だったが、エザルはだからと黙つて何もしなかつた。

・・・むしろ。

「じゃあ町に行けねえじゃん。ここにいていいだ。」

歩き女を、家に置くことにした。

「は？」

今度は歩き女が声をだす。

「はじやねえよ、どうせ町に居られないだろ？」

「・・・あたしとお前は他人だ。」

「そんなこと言つたら世界中他人だらけになるだ。・・・とりあえず、お前はまだ返さねえ。」

「・・・？」

「」で始めて、歩き女に見て分かる程度の表情の変化が浮かんだ。

「お前、全身に傷がある。・・・ちゃんと医者に診て貰つたのもあるけど、自分で応急処置で済ませたのもあるだ。」

「・・・なんで分かる？」

歩き女の問いに、エザルは苦笑いした。

「だからいったる、俺一応医者なんだよ。」

あ、人ん家だからって遠慮しなくていいだ。この小屋、俺一人だし。

「

「・・・信用できない。」

「あ?」

「それに悪意がなかつたら悪いが・・・あたしは簡単に入を信用できない。」

「それでもいい。」

「え?」

エザルのあつさつしおぎる答へに、歩き女はまた戸惑つ。

「信用とか、なくともいいよ。俺があんとのこと襲つたりしたら殺してくれてもいい。」

「・・・。」

「ああ、俺エザル・クノライな。エザルって呼べよ。

あんたは何だつけ、ジョライドだつけ?じゃあジョラでいいな。」

「なんで、そこまでする?」

歩き女の問ひに、エザルは笑つて答えた。

「そりやあ、まあ医者だからって言つのあるもあるし、こんな森に女一人追い出せないって男のプライドもあつたりする。でも・・・一番は、ようは俺は一人で過ごすのが嫌いなんだよ。」

その答へに、歩き女ジョラは、泊まる他になくなつたのだ。

## 小屋に一人

夜が更ける。

嵐のように雨が降る小屋の中で、エザルは久しぶりに1人ではない夕食を食べた。

「・・・・・。」

「・・・・・。」

「・・・・・。」

「・・・・・。」

それは無口な客人のせいでの、会話が進むことはなかつたが。  
それでもエザルは、1人ではないという明確な事実が嬉しかつた。

エザルの住む森には、よく旅人が迷い込む。  
いままでも、そんな旅人を小屋に泊めたりした。

それが、最強と語られる「歩き女」であつても関係ない。

そんなどこが、エザルの変人と呼ばれる理由になつてゐるのかもしない。

「じゃあ俺はここで寝るから、ジヨウはベッドで寝るよ。」

「あたしは寝ない。」

「はあ？」

雨が小降りになつて落ち着いてきた森の小屋に、一人分の声がある。

「誰かと同じ空間で寝ると話すことができるない。」

「・・・人間不信め。」

ジヨラの冷たい言葉に、エザルは悔しそうに呟いた。

ジヨラは、エザルの中で野良猫のようなイメージになつてきていた。

それを手なずける感覚で話しかける・・・

なんて思つていいことがばれたら、殺されるかもしれないが。

「それに・・・

他人の家で家主の居場所を奪つてまで眠れない。」

ジヨラの呟いた言葉に、エザルは一瞬呆気にとられた。  
そして、ふつとゆるく笑つた。

「こんなところが、可愛い野良猫なのだ。」

結局、

意地でもここに寝る、お前がベットで寝まいが関係ないと言い張つて、ジエラが根負けした。

「傷が痛んだりしたら起こせよ。」

おやすみと言ひのは何故か照れくさい。  
だから、そう言いながらランプを消した。

「お前が初めてかもしない。」

「え？」

真っ暗闇の中、ジエラが口を開いた。

「あたしのことをジエラと呼んだの……  
あたしが死んで以来だ……」

「へ……え……」

睡魔で回らない頭で答えたエザルは、このときのジエラの言葉なんて、深く考えてもいなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7646r/>

---

W A R K S

2011年10月8日22時03分発行